

「農山漁村」経済・生活環境創生プラットフォーム 学生専門部会(第2回) 説明資料



2025年12月15日

スケジュール

- 15:00～15:05 開会挨拶(農水省)
- 15:05～15:10 第1回の振り返り・第2回の目的説明
- 15:10～15:25 地域事業者視点の期待や課題について
地域事業者の個別ヒアリングまとめ(リディラバ) (5分)
日本グラウンドワーク協会、bankupからの補足 (10分)
- 15:25～16:00 グループディスカッション①
グループメンバー自己紹介 (各1分×3～5名)
テーマ:「これまでの地域活動で地域側の意向をどう把握してきたか」 (35分)
- 16:00～16:05 休憩
- 16:05～16:40 グループディスカッション②
テーマ:「地域ニーズと学生団体の意向のバランスを考えた活動について」 (35分)
発表内容まとめ
- 16:40～16:50 各グループ発表 (各5分×2チーム)、質疑応答
- 16:50～16:55 総括(農水省)
- 16:55～17:00 閉会挨拶と次回スケジュール

開会挨拶

農林水産省 農村振興局
農村政策部長 河村 仁

第1回検討会の振り返り

学生専門部会の目的とゴール

目的

農山漁村における若者の「定着」の増加には、地方創生・課題解決に問題意識のある学生に農業・農村面に目を向けてもらうことが重要。より多くの学生の参入を促進する。

- 学生による農山漁村への貢献方法の類型化、及び学生にとってのメリットの整理
- 多様なステークホルダー(企業及び自治体、中間支援組織)による学生の活動支援を促進するための支援メリットの整理、学生×中間支援組織×地域の連携モデルの構築
- 学生の活動をより継続可能、かつ効果的なものにするために必要な支援策の整理

本年度のゴール

より多くの学生による農山漁村への関わりの増加促進に向けた意見交換を行い、事務局にて手引きを作成し、多くの学生が地域と関わるきっかけとなることを目指す。

- 農山漁村に学生が関わる意義について目線合わせした上で、各団体の活動においてどのような課題があるか、どのような支援が欲しいかが共有され、学生が参画しやすい状態
- 地域や自治体などとの関わり方のパターンの類型化が整理されていることで、関係者各位が学生とのより適した関わり方を把握し、国や自治体、中間支援組織からの的確な支援を受けることができることを広く認知できる状態

第1回のサマリ

会議の目的と背景

- ・ 農山漁村の人口減少や高齢化が進む中、学生の「若者」として、また「地域外」からの視点としての関与が期待されており、参入促進と活動継続のための仕組みづくりの議論を実施した

議論されたテーマとアウトプット

テーマ1： 学生が農山漁村に関わる理由とメリット

- ・ 多世代とのコミュニケーションによる自己成長
- ・ 一次産業や地域事業者を知ることによるキャリア再設計への示唆を得る
- ・ 都市部では得られない農家や地域の方との充足感を持ったつながり
- ・ 高齢化による農家の担い手不足など地域の実情を現場レベルで理解できる
- ・ 生産現場を知ることによる食のルーツを知る機会
- ・ 農作業や地域行事に参加をし感謝される充足感や達成感
- ・ 自然豊かな環境で身体を動かすことで得られる気分転換
- ・ 農産物の成長や未経験の地域行事へ参加するわくわく感 など

<追加ヒアリング含めて明らかになった地域側のメリット>

- ・ 高齢化地域における若者の活力感化
- ・ 農繁期や慢性的な人手不足への労働支援
- ・ 行事参加による地域文化の継続遂行(例:神輿の担ぎ手)
- ・ 世代を越えた交流による刺激や学びによるモチベーション向上 など

第1回のサマリ

テーマ2：活動継続のための仕組みづくり

中間支援組織の役割	・学生団体と連携地域のマッチング ・交通手段や活動拠点の支援 ・学生と地域の「翻訳」役、活動の引き継ぎサポート ・学生のモチベーションサポート
課題	・特定の地域や個人への依存 ・学生のキャパシティの限界 ・地域側の負担軽減 ・学生と地域のコミュニケーションの円滑化
提案	・大学の単位認定システムの活用 ・スマート農業機械の導入による学生の活動範囲拡大 ・活動記録の発信や交流イベントの実施

- 第1回検討会では、学生が農山漁村に関わるメリットや活動継続に必要な視点を洗い出すことができた
- 学生が地域側視点をより深く理解し、団体間でも情報交流を図ることで、地域とさらに良い関わり方につながるのではないかと

連携地域の持つ課題を理解した上で互恵関係を築ける活動設計が必要

第2回 学生専門部会 について

第2回 学生専門部会の実施目的と参加者

- 学生が農山漁村に関わることで得られるメリットが連携地域にとっても持続可能なものとなるべく、実施目的を「学生団体が連携地域の実情を知り継続発展するための課題と必要な支援を明らかにするため、地域事業者の声を聴き、関わり方について深掘りすること」とする
- 地域事業者から事前ヒアリングを行い、学生へ共有したうえで、関わり方について深化する議論の場を設ける

<本日の参加者>

学生団体

- 北里大 北里農援隊
- 神戸大 地域おこしサークル 水芭蕉
- 静岡大 棚田研究会
- 千葉大 援農お宝発掘隊
- 東京大 東大むら塾
- 明治大 「楽農」4Hクラブ
- 名城大 地域共創隊WITH
- 龍谷大 学生団体rindo

中間支援組織

- 一般財団法人
日本グラウンドワーク協会
- NPO法人 bankup

地域事業者視点の 期待や課題について

地域事業者視点把握の背景

第1回検討会

- 学生が農山漁村に参画するメリットについて議論
- 連携地域の負担が多いと持続的活動が困難という課題感も再確認



学生が地域側の課題を認識し、
互恵関係のある方策を検討することで持続可能な活動に繋がる

連携地域へのヒアリング

- 地域側と接点を持ち学生の活動をサポートしてきた中間支援組織や自治体
- 現地で連携を実施した農家、地域事業者

事前ヒアリングで分かったこと

- 地域事業者にとって、負担の大きい日常作業等の支援があると連携持続がしやすい
- 地域に足を運び、現場や関係者の持つ課題やニーズを的確に把握することにより、成果に繋がる取組が増え、持続的な活動に繋がりやすくなる
- 学生団体は1年で代表が変わるため、丁寧に引継ぎや地域との情報交換を進めてもらえると、地域の負担も減り、一過性をもった活動にも繋がる
- 自治体側も体制変更があるため、自治体のみで支援体制の維持は難しく、キーパーソンに頼り切りにしない標準化の仕組みが必要
- 学生団体・地域の双方が対面でのコミュニケーション等を通じて事前に相互理解を深めておく点が重要
- 学生団体の設立背景や理念、活動方針等によっても、地域との最適な関わり方が変わってくる

事前ヒアリング(地域の声:詳細)

農業事業者や地域支援事業者(NPO)にヒアリングしたところ、多くの恩恵を感じている一方で、いくつかの課題を持っていることも確認した

	農家	地域事業者(NPO)
これまでの学生団体との関わり	・小学生が学年に1人ずつしかいない、といった地域にとって、学生が10人20人来てくれるというだけで活気が生まれ、いつもの地域の祭りがより盛り上がる。 ・道の駅やスーパーで作物を置かせてもらう交渉などを学生が能動的にやってくれたのは助かった。 ・食品加工は衛生面、資金、資格や申請など継続性に色々な課題があり、学生と農家双方のために生もの(収穫物そのまま)を大学の文化祭や地域の人に直接販売する等に留めている。	・過去自分からボランティアしたいと連絡してきた学生団体を受け入れたことがあった。熱量高く能動的に動き、提案もしてくれ、良い交流になった。 ・自団体で企画したイベントに参加してもらい、地域の人との交流を図った。どこでやっても変わらないと思われぬように魅力を打ち出さないといけなを考えている。 ・学生からの申し出でSNSのショート動画を作成してもらったことがあったが効果が表れにくかった。
現在の課題	・今は自分が農機具や保管倉庫などを提供できるし、日常の農地管理も対応できるが、将来的なことを考えると同様に準備を整えてあげられるかは不安がある。 ・農業は最低賃金ベースかつ繁忙期のみ人手が必要になる季節型労働という特性上、自助努力はしつつも国や自治体などの助成金やマッチング支援が充実しているとありがたい。 ・ゼミの課題もあるのか、課題解決のための分析をしたいと申し出る学生もいるが、まとめてみると抽象的ですでに分かっていることばかりだったりする。	・学生側にお客様のような遠慮があると、仲が深まらないので、地元の人も距離感を図りかねてしまい、準備などの負担もあるので次の招待には消極的な発言も出てきてしまう。 ・お金を払ってでも手伝ってほしい草刈りなど日常作業には誰も来てもらえず、イベントの時に初めまして、で来てもらおうと、任せられることや振れる仕事に限られてくる。事前にオンラインでの打合せはしているが、現地に複数回来てもらう単純接触が必要と感じる。
今後の課題や期待すること	・学生団体の代替わり、地域側のキーパーソンの交代による協力関係の希薄化は恒常的課題として双方で意識し必要がある。	・積極的な姿勢で関わってほしい。「こういったことがやりたい。」「こういうことができる。」というアピールや、一緒につくり上げていくという意欲を見せてもらえるとお願したいことも見えてくる。事前すり合わせなどを自分たちから要望・提案してほしい。 ・交通費を出すことは構わないが、一方で、自腹にすることである種の覚悟を持つことが出来る側面もあるのではないかと。



ヒアリング結果に対する補足やコメント

- 一般財団法人 日本グラウンドワーク協会 中里 様
- NPO法人 bankup 中川 様

グループディスカッション

グループディスカッションのルール

- テーマに対する正解はないため、それぞれの意見を否定せず尊重しながら、ディスカッションを進める
- 出た意見に対して深ぼりをしたり、共通点を見出すなどして、個々の意見出しで終わらないディスカッションをする
- ディスカッション内容を3分程度にまとめて発表してもらうため、発表者を決めてからはじめる

テーマ①

「これまでの地域活動で地域側の意向を
どう把握してきたか」

テーマ①

テーマ:これまでの地域活動で地域側の意向をどう把握してきたか

ゴール:連携先地域との関わり方を共有しあう

<POINT>

- ・ 地域側のニーズをどう理解したのか、その成功体験や失敗談の共有
- ・ どのような視点があると地域の課題が解決できるのかを考える

休憩

テーマ②

「地域のニーズと学生団体の意向の
バランスを考えた活動について」

テーマ②

テーマ:地域のニーズと学生団体の意向のバランスを考えた活動について

ゴール:地域の課題を解決しながら地域のニーズをとらえ、
学生の主体性も担保した活動の在り方を整理する

<POINT>

- ・ テーマ①でのポイントも鑑みて議論する
 - ・ 地域側のニーズをどう理解したのか、その成功体験や失敗談の共有
 - ・ どのような視点があると地域の課題が解決できるのかを考える
- ・ 自団体の活動方針や特長なども踏まえ、どうすればより継続性の高い活動になるかを具体的かつ多面的に考える

閉会挨拶

農林水産省 農村振興局
農村活性化推進室長 朝日 健介